

A: 屋嘉田潟原

植生は先述した通り (// 頁), 海産顕花植物 6 種, 海藻 52 種が生育している。この漁場におけるモズク生育帯の上限は最大干潮線とほぼ一致しているが, 例外として潮間帯に属する藻場にも生育している。水路から礁原にかけては生育していない。この漁場では砂礫帯と礁湖のしめる面積が大きく, モズクの生育帯がせまい。

B: 安富祖

この漁場は砂浜帯に接続する岩場から最大干潮時でわずかに露出する礁原近くまで生育している。礁湖の中にはサンゴの生育は少ない。植相はアオサ (+), ヒトエグサ (+), ヨレツタ (±), ビヤクシンツタ (±), マシバウミジグサ (+), ベニアマモ (±), ウミヒルモ (±), ウスユキウチワ (+), イソスギナ (±), イトアミジ (+), アミジグサ (+), ホンダワラ類 (±), オキナワモズク (+), 微細藻類等である。(参照表-5)。顕花植物群落はないが, 冬期にアミジグサ, イトアミジが群落をつくる。モズクは主としてウミジグサとホンダワラ類及びサンゴ細片に着生する。

C: 大久保

平均水深 2~3 m の広い生育帯がみられる。海底は白色の砂質が広い面積をしめる。点在して露出する岩場にはアミジグサ, ホンダワラ類が着生している。モズクはこの 2 種の他, サンゴ細片に着生している。

植相はリュウキウスガモ (±), ボウアマモ (±), マツバウミジグサ (+), ウミヒルモ (±), カイメンソウ (±), ウラボシヤハズ (±), ホンダワラ類 (±), アミジグサ (+), イバラノリ (+) 等含めて 22 種である。モズクは, ホンダワラ類とアミジグサ及びサンゴ細片に着生している。

モズクの生育帯の上限は陸上に由来する浮遊懸濁物質がみられなくなる水深 1.5 m のところである。

以上のことからモズクの生育帯の上限は一般的には最大干潮線と一致し, 下限については水深 20 m まで観察されているが, 生育が多くみられるのは水深 1~3 m までである。しかしモズクの生育は砂泥の推積や懸濁によって影響をうける。またサンゴの生育している礁湖や礁原の近くにモズクの生育がみられないことは, 礁縁における碎波とこれに起因する海水の流動によって影響されているように思われる。モズクの生育をさまたげる流動の早さはサンゴが生育できる程度のものであると考えられる。カイメンソウ群落もモズクの生育できない環境をみるうえで指標の一つとなりうる。

着生基質としては海産顕花植物, サンゴ細片, ホンダワラ類, 空きカン, ビニール袋, 建て干し網の杭等であり, 古タイヤ以外は何にでも着生する。

2 季節的消長

モズクの生育帯が屋嘉田潟原において図-9 のように季節的推移を示した。すなわち 1972 年中旬に舌状になった海草群落 (藻場) の先端部にほぼ円状にモズクの幼体が観察され, 日数が経過するに従って次第に右の方向に楕円状に拡大するのが観察された。その最大分布域は 5 月中旬であり, 6 月に入ると逆にその範囲は縮小する傾向がみえ, 7 月中旬になると水深 15~20 m の深みのみとな

った。また生育水深の深い大久保では1973年11月初旬すでに5cm位の幼体が多くみられている。このように水深の深いところでは早く発芽し、しかも遅い時期まで残る。モズクの生育と水温との関係は重要であると思われる。

屋嘉田の藻場と水路の最高水温(図-20)から考えると消失期に相当する6~7月には5℃以上の差があり水路が常に低い。さらに水路の表面水深と水深20mでは断続的な測温結果からではあるが明らかに後者の方が1℃以上低い傾向を示す。

沿岸水温(那覇)とモズクの発芽時期(屋嘉田)をみる

と図10。図11に示すように水温が21~22℃になるとモズクの幼体がみえ、また水温が25~26℃を越

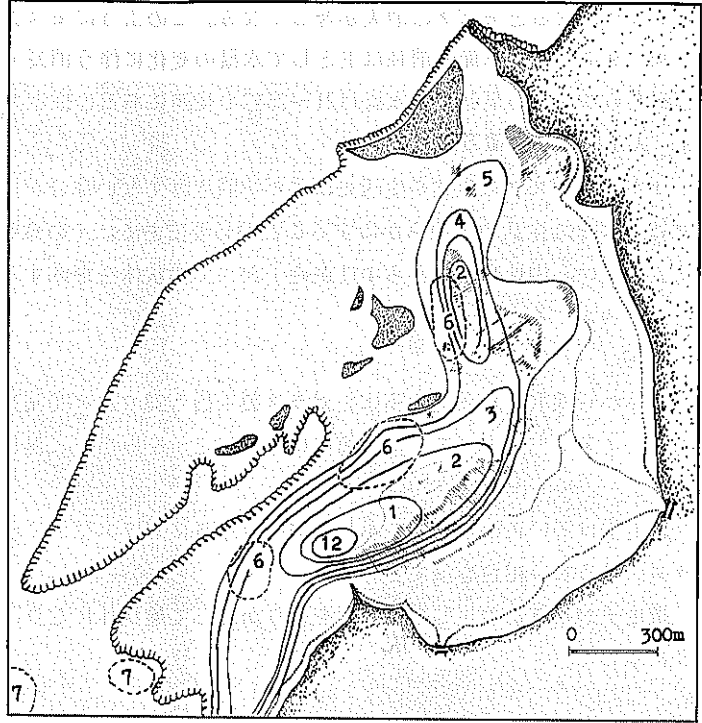


図-9 オキナワモズクの季節的消長

■ 藻場 ○ 分布域数字は月

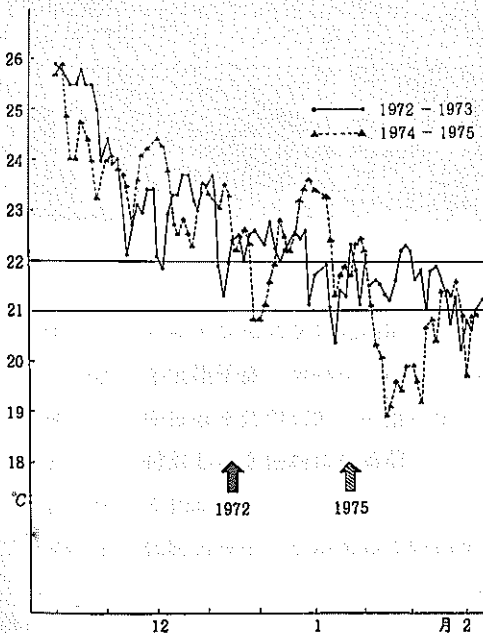


図-10 沿岸水温(那覇)とモズクの発芽時期(屋嘉田)

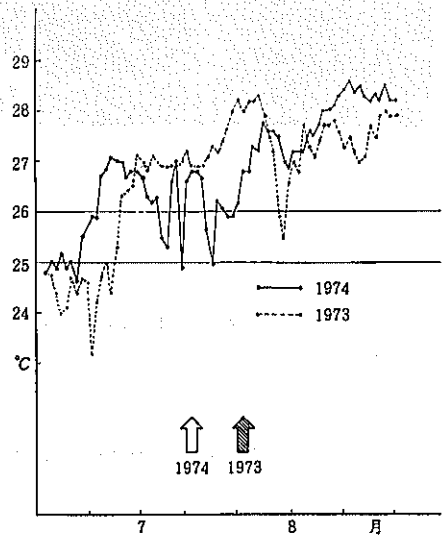


図-11 沿岸水温(那覇)とモズク消失時期(屋嘉田)